様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：２５３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１１００６

研究課題名（和文）長期療養高齢者に特有の苦痛を緩和するための看護実践に関する研究

研究課題名（英文）Research on nursing practices to palliative the unique discomfort of elderly people receiving long-term care

研究代表者

井上　かおり（Inoue, Kaori）

岡山県立大学・保健福祉学部・助教

研究者番号：７０７７１０７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、長期療養高齢者に特有の苦痛および苦痛を緩和するための看護実践を明らかにし、長期療養高齢者のための緩和ケア指針を開発することであった。まず、「長期療養高齢者の苦痛」の概念について文献検討を行い、「長期療養高齢者の苦痛」の定義属性、先行要件、帰結を明らかにした。次に、看護師にインタビュー調査を行い、長期療養高齢者の苦痛を看護師の認識から明らかにした。最後に、文献検討および質的研究を基に考案した長期療養高齢者の苦痛を緩和するための看護実践について、信頼性および妥当性の検討を行い、5因子42項目で構成される長期療養高齢者の緩和ケア指針を開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
①開発した指針を用いた実践により、長期療養高齢者に安寧をもたらし、長期療養高齢者のQOLならびにエンドオブライフの質の向上に寄与できる。②日本では、制度上、医療として緩和ケアを提供することに限界があるが、本指針の活用により、緩和ケアを日常ケアに組み込むことができる。③学術的意義として、長期療養高齢者の苦痛を緩和するためケア実践に関連する要因の検討やアウトカムの検証を行うことが可能となる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop palliative care guidelines for elderly patients receiving long-term care. First, a literature review was conducted on the concept of "discomfort in elderly people receiving long-term care." Then, the definition attributes, antecedents, and consequences of "discomfort in elderly people receiving long-term care" were clarified. Next, interviews were conducted with nurses to clarify the pain of elderly people receiving long-term care from their perceptions. Finally, we examined the reliability and validity of nursing practices for palliative the discomfort of elderly patients receiving long-term care, which were developed based on literature review and qualitative research. We developed palliative care guidelines for elderly patients receiving long-term care, consisting of 5 factors and 42 items.

研究分野：高齢者看護

キーワード：高齢者　緩和ケア

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

高齢者では、苦痛の特定や予後予測に難しさがあることから、緩和ケアが行き届いていないことが指摘されている。また、日本では、緩和ケア診療加算の対象となる疾患が限定されていることから、対象疾患以外の疾患により療養する高齢者は、苦痛を見逃されやすく、苦痛緩和を目的としたケアを受けにくい。特に慢性疾患を有し、療養が長期に及ぶ高齢者（長期療養高齢者）では、継続的な医学的管理や日常生活全般にわたり援助を要するため、疾患に伴う苦痛のみならず、老いや療養に伴う多様な苦痛を抱えており、長期療養高齢者に特有の苦痛に焦点化した緩和ケアの開発が必要である。

２．研究の目的

本研究は、長期療養高齢者のエンドオブライフの質向上に寄与することをねらいに、①長期療養高齢者に特有の苦痛を明らかにし、②長期療養高齢者の緩和ケア指針を開発することである。

３．研究の方法

（１）研究１:「長期療養高齢者の苦痛」の概念についての文献検討

医学中央雑誌 WEB 版、Pub Med、CINAHL 等により選定した 32 文献を用い、Walker and Avant の概念分析の手法を参考に、「苦痛」の用法、「長期療養高齢者の苦痛」の定義属性、先行要件、帰結を明らかにした。

（２）研究２:看護師を対象としたインタビュー調査

A 県内の医療療養病床を有する医療機関 8 施設に勤務する経験年数 3 年以上の看護師 16 名を対象に、長期療養高齢者の苦痛を看護師の認識から明らかにすることを目的としたインタビュー調査を実施した。分析は、長期療養高齢者の苦痛に焦点を当て、質的帰納的に実施した。

（３）研究３:長期療養高齢者の緩和ケア指針の信頼性・妥当性の検討

①　調査対象

全国地方厚生局が公表する届け出受理医療機関名簿より無作為抽出した医療療養病床を有する医療機関のうち、調査への協力が得られた 145 施設の医療療養病床に勤務する看護師を対象に調査を実施し、997 の有効回答を得た。

②　調査方法

無記名式質問紙調査を実施した。調査票は対象施設の看護管理者を介して配布し、個別郵送法にて回収した。

③　調査内容

基本属性として、年齢、性別、看護師経験年数、所属部署経験年数、緩和ケアの経験の有無を調査した。所属施設の緩和ケア・高齢者看護提供体制として、緩和ケア病棟の有無、緩和ケアチームの有無、緩和ケア認定看護師の有無、認知症看護認定看護師の有無、老人看護専門看護師の有無を調査した。長期療養高齢者の苦痛を緩和するケア実践（以降、「緩和ケア実践」）として、文献より抽出し内容的妥当性の検討を終えた 48 項目を調査した。併存的妥当性を検討するために看取りケア実践（吉岡、2009）22 項目を調査した。

④　分析方法

項目分析により不適切項目を除外し、探索的因子分析による因子構造の検討を実施した。信頼性の検討として、緩和ケア実践合計点および各因子合計点の Cronbach’ｓα 係数算出した。妥当性の検討として、探索的因子分析により抽出した因子を２次因子、緩和ケア実践を１次因子とするモデルのデータへの適合性の評価および緩和ケア実践合計点と看取りケア尺度の合計点との相関係数を算出した。

４．研究成果

（１）長期療養高齢者の苦痛

①　研究１:「長期療養高齢者の苦痛」の概念についての文献検討

「長期療養高齢者の苦痛」の定義属性として、【身体的苦痛と苦悩の混在】【体験の多様性】【絶えず続く】【医療者による過小評価】【表面化されにくい】【存在への脅威】の 6 つが明らかとなり、先行要件として、【病気の進行や加齢に伴う心身の機能低下】【医療者の不適切な対応】【高齢者の否定的認識】の３つが明らかとなった。先行研究との比較から、「長期療養高齢者の苦痛」は、表面化されにくいために医療者に過小評価されやすく、医療者の不適切な対応の影響を受けることが特徴であると考えられた。

②　研究２:医療療養病床に勤務する看護師を対象としたインタビュー調査

看護師が認識する長期療養高齢者の苦痛として、【病気の進行や廃用に伴う身体的苦痛】【自律の喪失に伴う苦痛】【ケアに伴う身体的苦痛】【尊厳に配慮ない扱いを受けることに伴う苦痛】【関係性の喪失や不確かな状況により生じる苦痛】の５カテゴリーが明らかになった。

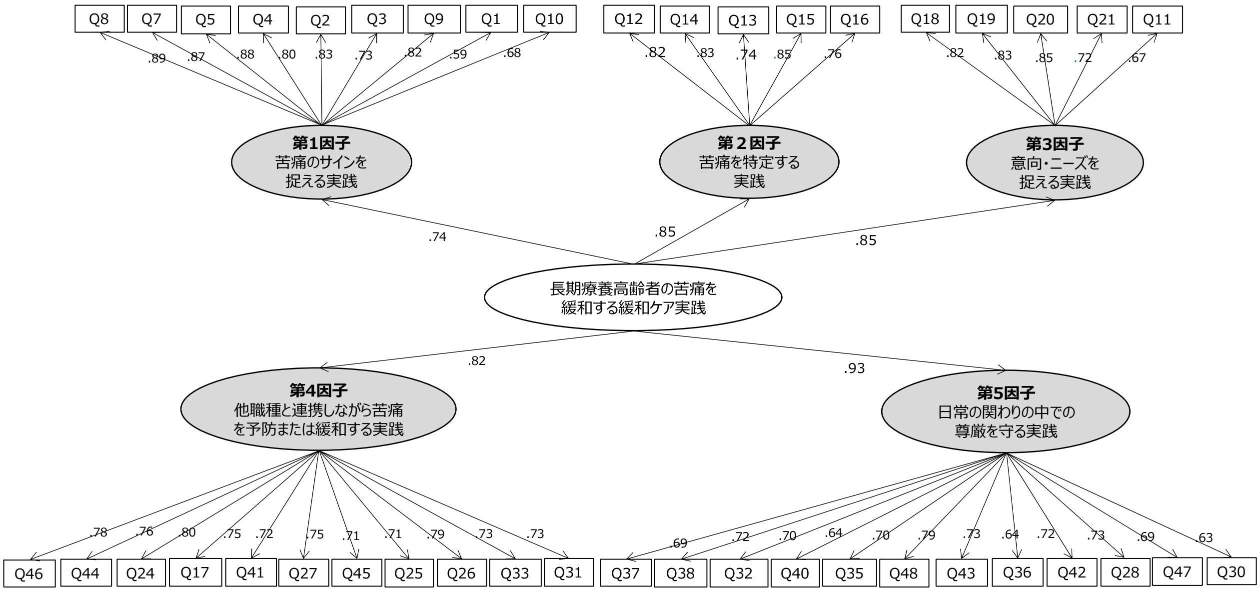
長期療養高齢者は、病気の進行や加齢に伴う機能低下により生じる苦痛のみならず、苦痛から生じる苦悩、医療者の適切なケアによって回避・緩和できる苦痛をもつと考えられた。

（２）長期療養高齢者の緩和ケア指針の信頼性・妥当性の検討

長期療養高齢者の緩和ケア指針は、項目分析により 1 項目を除外した 47 項目について探索的因子分析を行い、交差負荷を示さない、因子負荷量 0.35 以上、共通性 0.16 以上を項目採用の基準とし、42 項目 5 因子の構成とした。各因子に含まれる質問項目の内容から、第 1 因子を【苦痛のサインを捉える実践】、第 2 因子を【苦痛を特定する実践】、第 3 因子を【意向・ニーズを捉える実践】、第 4 因子を【他職種と連携しながら苦痛を予防または緩和する実践】、第 5 因子を【日常の関わりの中での高齢者の尊厳を守る実践】と命名した。

信頼性の検討として、Cronbach’s α 係数の算出を行い、42 項目全体で 0.949 であった。各因子では、0.824 から 0.908 の範囲であり、内的一貫性を確保していることが示された。

緩和ケア実践合計点と看取りケア尺度合計点との Spearman の順位相関係数は 0.707（p<0.001）であり、併存的妥当性が示された。確認的因子分析による構成概念妥当性の検討では、長期療養高齢者の苦痛を緩和するケア実践を 1 次因子、抽出した 5 因子を 2 次因子と仮定した確認的因子分析を行い、全てのパスは統計的に有意であった。5 因子モデルのデータへの適合性は、CFI 0.909, RMSEA 0.07 であり、概ね統計学的許容基準を満たしていたことから、構成概念妥当性を確認できた。



矢印上の数値はパス係数を表す、全てのパスは有意（p<0.001）
X^2＝4799.706（p<0.001）、CFI＝0.909、RMSEA＝0.07

図１　確認的因子分析による構成概念妥当性の検討

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 井上かおり、加藤真紀、原祥子	４．巻 28（1）
２．論文標題 「長期療養高齢者の苦痛」の概念についての文献検討	５．発行年 2023年
３．雑誌名 老年看護学	６．最初と最後の頁 89-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 井上かおり、加藤真紀、原祥子	４．巻 -
２．論文標題 看護師が認識する長期療養高齢者の苦痛	５．発行年 2024年
３．雑誌名 島根大学医学部紀要	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 井上かおり、加藤真紀、原祥子
２．発表標題 長期療養高齢者の緩和ケア指針の内容的妥当性の検討
３．学会等名 日本老年看護学会第29回学術集会
４．発表年 2024年

１．発表者名 井上かおり、加藤真紀、原祥子
２．発表標題 長期療養高齢者の緩和ケア指針の信頼性・妥当性の検討
３．学会等名 日本看護研究学会題50回学術集会
４．発表年 2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	原　祥子 (Hara Sachiko) (90290494)	島根大学・学術研究院医学・看護学系・教授 (15201)	
研究分担者	實金　栄 (Mikane Sakae) (50468295)	岡山県立大学・保健福祉学部・教授 (25301)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関